九月二十六日、門司城が陥落し、落ちゆく波多野大和守興滋父子や須子大蔵丞を討ち取り、怒留湯主水を門司城番として、豊後勢は帰国した。

波多野興滋は大内義長の奉行衆であったが、毛利元就の調略に応じて毛利方に降り、門司城督を務めていた。

大友義鎮の全盛

こうして、大友義鎮の得意絶頂の時代が訪れた。大友義鎮は亡父義鑑に倣って、衰えて経済的に窮乏していた幕府要人へ献金を続け、豊後・肥後・肥前・筑後・豊前・筑前と次々に守護職を手に入れ、大内家督の座や長門・周防の守護職まで与えられ、九州探題職に補任された。もっとも、防長は毛利氏の支配下にあったのであるから、幕府の毛利氏に対する牽制であった。毛利氏は、大友氏が防長へ渡海してくるのを恐れてか、間もなく、石見大森銀山を公方に献上して、周防・長門守護職に補任された。

二　大友氏と毛利氏の衝突

門司城争奪戦

永禄三年（一五六〇）十二月、毛利元就は、仁保右衛門大夫隆慰を渡海させ、門司城を奪回した。以後、仁保隆慰は永く豊前で活躍することになる。彼も大内義長の奉行衆であったが、毛利元就の調略に応じて、毛利方となり、弘治三、四年には奉行衆をも務めた。

門司城が奪取されたと知らされた大友義鎮は、永禄四年正月、吉岡長増・臼杵鑑速の二家老と田原親宏・志賀親度・朽網鑑康ら六国衆に一万五〇〇〇余の兵をもって、門司城奪回のため、豊前への出陣を命じた。

大友国家挙っての大軍は、抵抗する香春岳・松山城・花尾城を攻略して、九月ごろ、門司城に接近し、布陣した。

毛利元就も、子息隆元に一万八〇〇〇余の兵をもって救援に向かわせ、隆元の弟小早川隆景に一万余の兵を割いて渡海させた。隆景勢を門司へ渡した児玉内蔵丞就方・乃美兵部丞宗勝・村上元吉らの水軍は、蓑島辺を漕ぎ回り、豊後水軍と戦って、九月、舟八隻を捕らえ、水主一三人を生け捕り、十月、今井・元永に待機していた敵船数十隻を拿捕し、京都・仲津の二郡を占領して、豊後との通路を遮った。

連日、野臥り合戦を続けてきた豊後勢は、春以来の長い豊前在陣に疲れ、はかばかしい戦果もなく、迫りくる寒気の中で、後方を分断されて、撤退を決し、十一月五日の夜、ひそかに陣山を下り、門司浜・大里・赤迫を経て、貫山を越え、彦山下を通って、苦難の末、日田にたどり着いた。宇佐郡衆も二老に従って日田まで退いたが、田原親宏ら北浦辺衆は、貫山から分かれて、黒田原・天生田・国分寺原を通って国東へ向かったため、道待ちしていた杉因幡守隆哉・浦兵部・野島（他）・来島勢数百人に終日、付け送られ、多数の犠牲者を出して帰国した。杉因幡守隆哉は大内義長時代は、宇佐郡妙見岳城督であったが、弘治三年（一五五七）六月一日、武蔵田原親賢の入国で下城し、広津城に籠城して、大友方として行動していたが、やがて毛利方に寝返った。犀川町の大村に因州城があったと『豊前志』は記しているが杉隆哉が拠った城であろう。仲津・京都郡の地理に詳しい杉隆哉の案内で、毛利水軍が北浦辺衆を待ち伏せしていたのである。

大友義鎮は、このころ出家し宗麟と号した。まだ三十歳そこらの若さであった。また、臼杵の丹生島に築城

小早川隆景の花押

して住んだという。丹生島城は、弘治三年五月、義鎮が玖珠郡へ出張して留守中に焼失したという記事もあるから、この時期に大修築し、毛利水軍の攻撃に備え、九州探題の居城にふさわしい体裁を整えたものであろう。

門司城敗戦は、大友義鎮にとって、初めての敗戦であり、彼のプライドをいたく傷つけた。出家したのも、その精神的動揺を示したものと考えられる。

大友方高橋鑑種の離反　大友宗麟に、更にショックを与えたのは、高橋鑑種の離反である。高橋鑑種は、大友一族一万田鑑相の弟で、宗麟の父義鑑のころ、筑前の大蔵一族高橋家を継がせ、鑑の一字を与えて、鑑種と称させた。宗麟初政に肥後国で起こった菊池義武の乱や小原鑑元の乱鎮定に活躍したため、筑前宝満岳城督を命じ、叛服を繰り返す秋月・筑紫氏へのにらみとした。毛利元就は家来の山田満重・有田加賀守を博多へ派遣して高橋鑑種への調略を行わせ、永禄五年（一五六二）の暮れ（『山田文書』九九、萩藩閥閲録）、これに成功した。鑑種内応の原因は、兄鑑相が反逆の廉で殺されたこと、更に美人で評判の兄の妻を宗麟が愛妾としたことで、宗麟を恨んだと俗書は述べている。最近では、奉行衆として仕えた大内義長を兄宗麟が見殺しにしたこと、筑前一国の支配をねらう野心（荒木清二「毛利氏の北九州経略と国人領主の動向―高橋鑑種の毛利氏方一味をめぐって―」『九州史学』九八号）などが指摘されている。

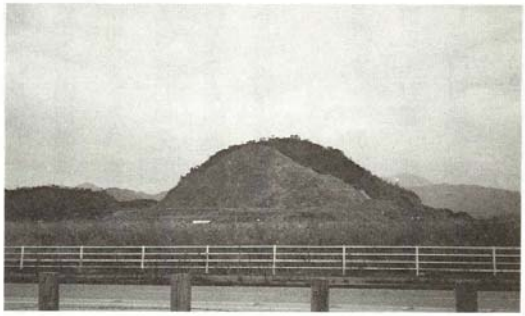
門司城敗軍をきっかけとして、高橋鑑種をはじめ、筑前・豊前の牢人（旧大内氏家臣）が次々と蜂起したため、大友宗麟は門司城再征を命じた。門司敗軍後、豊前では、西部の企救・田川・京都・仲津の諸郡は毛利氏の掌握するところとなっていたから、再征軍は、また香春・松山城を攻略して門司城へ向かわなければならなかった。

松山城の攻防

松山城（苅田町）は、大内氏時代、守護代の役を世襲した杉伯耆守家の居城であったという。杉重矩（重清・重輔が不慮の死を遂げたあと、重輔の子松千代丸（重良）が幼少の身で居城し、ここへ大内氏から離反した杉因幡守隆哉が入城していたが、毛利元就は、備後の国人天野紀伊守隆重を城督として派遣し、内藤就藤・毛利元種・小野俊久・中村就久・三戸有次らを城番として詰めさせ、豊州勢の来攻に備えていた（第5図参照）。

永禄五年（一五六二）九月朔日、松山城を包囲した豊州勢が攻撃を仕かけてきたが小競り合いに終始した。戸次伯耆守鑑連らは門司城下まで進撃し、十月十三日、大里において、門司城将冷泉元豊（二十五歳、大内一族）以下を討ち取る戦果を挙げ、十一月二十六日にも、終日、門司城下で合戦があり、数百人の負傷者・死者を出した（『浦文書』萩藩閥閲録）。

翌永禄六年正月、毛利隆元と小早川隆景の大軍が到着して、両軍にらみ合いとなった。ここに、京都から公方義輝の斡旋が入り、聖護院道増・久我通興が両者の間を往復して調停した。毛利元就は「近頃、迷惑至極に候へ共」と、しぶしぶ調停に応じた。その実、毛利元就と吉川元春父子は、出雲白鹿城（松江市）攻撃に懸命で、下口への支援どころではなく、一刻も早く、隆元・隆景を出雲へ呼び寄せたい状況にあった。大友宗麟の豊前出兵は、北口の尼子義久との連携による行動であった。



第5図　松山城跡

毛利・大友の一時和睦

両者和平の条件の中心は、毛利方についた豊筑の国人たちの処遇と、その居城の処置であった。とりわけ、高橋鑑種の宝満岳城と門司城を結ぶ連絡路にある松山城・香春岳城の処置がなかなか決まらず、永禄六年（一五六三）六月、やっと両者合意に達し、翌年七月二十五日、講和の神文が交換され、松山・香春両城を臼杵新介・入田（にゅうた）治部少輔・ト野対馬守に打ち渡すよう指示された。毛利元就にとって、この講和は出雲白鹿城攻略のための時間稼ぎにすぎず、「何篇、一ハ和平、二ハ彼密談ニてあるべくや」「ただ一年・二年之間なととまてハ豊に同心有間敷候」（『兼重文書』萩藩閥閲録）という方針を曲げてはいなかったのである。

永禄七年九月、早くも、大友宗麟や大友家四家老からの抗議書が、聖護院道増・久我通興へ届けられた。それによると、「依然として、毛利氏と高橋三河守鑑種らとの連絡が行われており、豊筑の間で、逆徒に荷担し、城郭を構え、さまざまな隔心の策謀をなしており、信用できない。毛利氏がそのような態度をとり続けるならば、大友氏としても、防長の旧大内家の家臣を蜂起させて、大内家再興の手だてを打たざるを得ない」というものであった。

大坂山の戦い

永禄八年（一五六五）五月、長野筑後守吉辰は、四年ほど前、人質を佐田氏に預けて、大友氏に対し忠誠を示してきたが、ここに至って離反した。田原親宏率いる国東・速見・宇佐・下毛郡衆が、その里城を攻め、猛攻を重ね、多数の死傷者を出したすえ、攻略した。

大友氏は佐田隆居ら一〇人の検使を派遣し、郡々に二人ずつ配置して、闕所地を摘発し、段銭の徴収を厳しく行った（『大友家文書録』）。

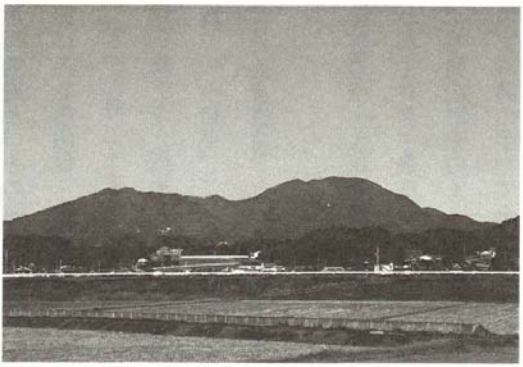
永禄九年（一五六六）十一月、出雲の富田月山城の尼子義久が和睦の形で開城すると、毛利氏は下口へ露骨な調略を行って、豊筑への進出をねらうことになった。それまでは、門司城・松山城を押さえ、一方で、豊筑の国人たちをそそのかすことによって、大友氏の防長に対する野心を牽制してきたが、北口の憂いを除いたあとは、豊筑の国人たちの期待にこたえて、博多・太宰府への進出という野望をあらわにしてきた。

永禄十年（一五六七）六月、高橋鑑種が宝満岳城から行動を起こすと、これに呼応して、秋月種実が古処山で、筑紫広門が五箇山で、相次いで挙兵した。更に立花城の立花鑑載が、高橋鑑種による度々の勧誘にこたえて、永禄十一年（一五六八）六月、挙兵に踏み切った。

このような時機に、大坂山で、西郷隆頼・杉隆哉らが挙兵した（第6図参照）。

一・五月三日（永禄十一年）、長野筑後守江量（ママ）忍入り生害し候、是ハ到津被官の者仕り候由に候、又、毛利家より、三岡・等覚寺通路ニ宮尾城取り候、ここに、筑後守ハ打たれ候へ共、同名兵部・左京、彼三岡を持ち、等覚寺をも同名三河持コタヘ、豊州に至り進上し候、同六月廿日、豊州より宮尾せメ落され候、中国衆五十余打留められ候、其後、ツイキノ郡別符に宿陣し候、又、都郡大坂山ヲ杉因幡守・西郷両人ニて取誘（こしら）え候、是又、せメ落され、杉領も西郷も向（降）参し候、又各ハ別符に至り帰陣し候

（『到津文書』四三一、原文漢文体）



第6図　大坂山

西郷隆頼・杉隆哉挙兵のねらいは、門司城・松山城・香春岳・立花城・宝満岳の連絡路の確保と、大友方となっている長野氏の三岳城を孤立させることであった。『萱嶋文書』では、「杉・西郷両城においても累日防戦」とあるから、因州城・不動ケ岳に挙兵したあと、大坂山へ逃げこもったのであろうか。大坂城も攻め落とされ、杉・西郷両人は降伏した。

日田郡において申し与え候地の代所として、豊前国仲津郡の内、安留源内跡弥吉九町分、同郡の内、玉井中務丞跡□（小カ）犬丸拾五町分の事、預置き候、知行あるべく候、恐々謹言

（永禄十一カ）十月十一日　　宗麟　在判

桜井藤兵衛入道（紹白）殿

（『大友文書録』）

右の史料は、当町安富の武士源内らの知行地を桜井紹白という豊後の武士に与え、これを吉岡宗歓ら四老が城井左馬助へ打ち渡させている。安富源内らは、西郷隆頼・杉隆哉らに従って、大友氏に敵対したため、その所領を闕所されたらしい。

三岳の戦い

永禄十一年（一五六八）五月三日、大友方に降っていた長野筑後守吉辰が暗殺された。宇佐大宮司到津氏の被官の仕業という。

そのあと、長野兵部少輔弘勝と同左京亮某が三岳城にこもり、長野三河守助守（祐盛、三郎左衛門、秋月種実の弟種信）が等覚寺に立てこもった。これに応援隊として、田原親宏の手兵が詰めていた。毛利氏は仁保隆慰に命じて、三岳・等覚寺の間に宮尾城を築いて、両者を分断し、中国勢の到着を待ったが、六月二十日に豊州勢に攻略され、五〇余人が討ち取られた。

永禄十一年八月、吉川元春・小早川隆景の両川軍数万が渡海して、三岳・等覚寺を一息に攻め落とした。三岳城では、長野弘勝・同左京亮や田原親宏の家来ら五百数十人（『森脇覚書』）が討ち死にした。等覚寺にこもっていた長野三河守助守は、豊後勢とともに敗走し、豊後に亡命した。こうして、豊前の西半分は毛利方の支配となった。

戦国時代の国分寺領　ここで「国分寺領寺辺西郷中村分未進目録」を紹介し、内容を考えてみよう（『大友利根文書』大分県史料㉕二四九号）。

「（端裏書）永禄五六七八九マテ之勘定分　（貞筆）「至二安東一遣レ之案文」

国分寺領寺辺西郷の内、中村未進目録　」

国分寺領寺辺西郷の内、中村拾四町五反分の事、（衆脱カ）安宗覚并びに同名其外家中衆、相拘えられるといえども、近年、土貢・定銭・夫銭以下、勘定を勤めざるの事、豊州御代は領主、検地検見をもって、済物堅固ニ申付べき事余儀無き由、度々申し候といえども、土貢定銭夫銭の事、前々相定むるの前これ在るの由、佗言の条、先々勘文かくの如し

一　永禄五年分、不作ニ依り済物の勘定これ無し

一　永禄六年、当作これ在りといえども、不作同前ニ勘文これ無し

一　永禄七年分の事　拾四町五反内　五反永不　七町定銭七貫文未進也

第7図　三岳城跡

七町ハ定米七石　此内壱石弐斗五升七合これを納む
五石七斗四升三合未進也
并びに夫銭の事　右の七町分ノ夫銭弐貫百文　未進也
七町ニ夫銭壱貫四百文　未進也
以上未進銭拾貫五百文　同未進米五石七斗七升弐合
一　永禄八年分　拾四町五反内　五反永不　七町定銭七貫文
此内五百廿文これを納む、六貫四百七十文未進
七町ハ定米七石　此内三石八斗六升五合これを納む
三石壱斗三升五合未進
右の夫銭三貫五百文、蓋し未進なり
以上未進銭玖貫九百七十文　同米未進三石壱斗三升五合
一　永禄九年分　拾四町五反内　五反永不　七町定銭七貫文皆未進
七丁定米七石　此内五石壱升これを納む　壱石玖斗玖升未進
夫銭定銭拾貫五百文皆未進
以上未進銭拾貫五百文　同土貢壱石玖斗玖升これを未進す
右三ケ年未進銭　合参拾壱貫五百文　此内五百卅文これを納む
卅貫玖百七十文未進

彼未進銭、米和市散用の時は、六拾壱石玖斗四升
土貢未進米の事　三ケ年分土貢辻弐拾壱石
此内拾石壱斗三升二合これを納む、拾石八斗六升八合未進
延テ拾七石参斗八升四合
惣都合銭米土貢共ニ七十玖石六斗弐升四合欠
右の外ニ安堵料これ在るべし、并て三貫文藪田小苗代壱町分定銭、仍って勘文件の如し
永禄玖年十二月廿八日　　納　所　円海（花押）
木坂右京進宗弘（花押）
山本兵部丞家久（花押）

この史料は、国分寺領として、この時期まで存続してきた仲津西郷中村（犀川町中村）の納入物が滞納となっている状況を、作職所有者である安東氏へ提出したものである。この寺領中村は一四町五反からなり、うち五反は耕作不能地、七町は定額の銭納年貢、七町は定額の米納年貢となっている。夫役も銭納することになっていて、毎年三貫五〇〇文納める。定銭・夫銭を米で納める場合は、米二石で銭一貫文を交換する。

永禄五年（一五六二）は不作で年貢免除、同六年も不作同前となっている。『下毛保内百姓等愁状案』（湯屋文書）でも、永禄五年は、諸軍勢の到着で田畠ともに切り取られたため、公領・給地では古未進を棄破されているのに、下毛保のみ古未進を厳しく催促されるのは堪えがたいと訴えている。永禄五、六年分の年貢徴収がなかったためか、同七、八、九年と未進が嵩み、三か年で未進米高が八五石余にもなっている。こう

なると寺領とは名のみで、作職保持者である地侍的名主の私領化している。

立花城の攻防

三岳を攻略した両川軍は、帆柱城を経て、芦屋から宗像へ進み、立花城を目指した。

立花城では、永禄八年（一五六五）七月九日、戸次鑑連・吉弘鑑理らが入城し、怒留湯主殿助を西城督として、大友方の守りを強化した。前々からの城主立花鑑載が、高橋鑑種らから、しきりに調略を受けていたから、彼の動きを懸念して、先手を打ったのである。

その立花鑑載（入道宗冊）が、永禄十一年（一五六八）六月、高橋鑑種の誘いや脅しに屈して、立花西城督怒留湯主殿助を追い落とした。戸次鑑連・吉弘鑑理らは、直ちに立花城を包囲し、攻め落とした。立花鑑載は城を出て、宗像方面へ逃走中、大友方の待ち伏せに出会い討ち取られて、首を宗麟のもとへ送り届けられた。

立花鑑載が滅亡した二か月後の九月、両川軍五万余（『老翁物語』は四万）が立花城を包囲し、翌永禄十二年（一五六九）閏五月まで、豊後勢一二万余（『老翁物語』は六万）が、これを遠巻きしてにらみ合った。豊後の後ろ巻き勢が立花城に近付きえないままに、城内では水や食料が尽き、大友宗麟も降伏を許可したので、田北民部・鶴原掃部らは降伏し、城を渡した。

毛利方は、彼らを丁重に志賀島の大友陣へ送り届けた。

立花城を陥れた両川軍を大友方は包囲したまま十月までにらみ合った。

この間、豊前西部四郡を支配下に入れていた毛利方は、豊前東部への進出を図って、野仲鎮兼、宇佐宮社官時枝・宮成氏らと連絡をとって、水軍に命じて上毛郡から下毛郡沿岸の集落を焼き払い、一部は府内の港

に侵入して艦船を襲った。

大内輝弘の山口侵入

大友方も、水軍を防州秋穂（あいお）に上陸させ、地下（じげ）の一揆と連絡して山口侵入の構えをみせた（『内藤文書』萩藩閥閲録）。

次いで、大内太郎左衛門尉輝弘を山口に突入させて、毛利氏の後方を攪乱（かくらん）させた。

大内輝弘は大内義興の弟高弘の子といわれる。大内高弘は、氷上山興隆寺の別当であった僧尊光で、杉平左衛門武明らに擁せられて、兄大内義興から家督の座を奪おうとする陰謀が露顕して豊後に亡命し、還俗して高弘と称し、大友親治の食客となって、帰国のチャンスを待っていた。

永禄八年（一五六五）六月、大内輝弘は平岡（伊予市）へ渡海し、屋代島（周防大島）で陶晴賢の旧臣内蔵某らと合流したが、毛利方の来島水軍に襲われて惨敗し、一味ほとんど殺された。大内輝弘は豊後へ逃げ帰った（『永弘文書』）。これは、毛利元就が尼子義久の立てこもる富田月山城攻撃に全力を傾注している虚を衝く行動であった。

大内輝弘の花押

永禄十二年（一五六八）十月十一日、大内輝弘は再び渡海した。半年ほど前から、約束手形を乱発して同志を募っていたが、豊前の新興領主緒方備後守鎮盛・吉村哉勝（としかつ）・屋方兼諸（もろ）・恵良備前守鑑秀ら五〇〇ばかりの兵と大友宗麟の命令で出動した豊後水軍の大将若林中務少輔鎮興の船に乗って、豊後から周防秋穂浦へ上陸し、一路山口を目指して進撃し、山口に突入すると、市街に火を放ち、鴻ノ峯（高嶺）城の手薄をついて攻撃をかけた。このとき、防長の旧大内家の牢人も若干一揆して、各地で蜂起し、不穏な情勢が広がった。

このころ、毛利元就は、孫の輝元とともに赤間関に下向していて、筑前立花城の小早川隆景・吉川元春へ指示を与えていたが、手元が手薄なので、山口の社家・寺家の者までも赤間関に動員していた（『内藤文書』）から、大内輝弘の山口侵入は、まことに効果的であった。しかし、小勢の大内輝弘軍は鴻ノ峯を攻略できず、対岸の築山竜福寺に陣をとって、攻略の策を練ることにした。

これより三か月前、山中鹿之助が、出家して京都にいた尼子勝久を擁して出雲に侵入し、天野隆重らが詰めていた富田月山城を包囲し、石見まで揺さぶる勢いを示していた。備後でも、藤井能登守入道皓玄（『老翁物語』）を中心とする国人一揆が、浦上宗景や村上元吉と連携して蜂起するという情勢を利用して、大内輝弘が帰国をねらったのである。

十月十三日、大内輝弘方の軍将城井小次郎が、山口付近を流れる大河の上流の浅瀬を渡ろうとしていたとき、山口高嶺城へ駆け付けていた吉見一族上領頼規父子と行き合い、合戦となって、宮野口で、子息頼武を討ち取った（『赤木文書』萩藩閥閲録）。

毛利軍、九州から撤退

十月十五日、毛利元就は、立花城在陣衆に撤退を命じた。立花城には乃美宗勝・坂元祐・桂元重ら一〇〇〇人を残し、在陣衆の無事撤収を見届けさせた。これを知った大友方は遠賀川渡口まで追撃し、数百人を討ち取ったが、大崩れすることなく、毛利勢は芦屋付近から乗船して関府へ到達した。このとき、豊州三老の調略状を小早川隆景へ差し出して、「万事を抛ち、芸州御一篇」を誓った麻生摂津守隆実は、豊州勢の追撃を阻止した。大友宗麟は、半年前、田北民部以下を送り届けた恩義によって、

毛利輝元の花押

乃美宗勝ら立花残留衆を湊まで送り届けたと諸書に記述している。

十月二十日、毛利元就は、吉川元春・福原貞俊を長府から出立させ、長門有穂、周防白松北南・木波・床波・山代五か村一揆などを鎮圧する一方、山口の大内輝弘討伐を命じた（『舟越文書』萩藩閥閲録）。

山口築山の大内輝弘は、対岸の鴻ノ峯に敵兵が続々と入城しており、毛利本隊が山口へ進撃してくるという噂におびえ、豊後への撤兵を決し、右田岳下を通り、敵軍の追撃を退けながら、糸祢峠を越え、合尾浦へ出たが、豊後水軍は撤退していて影がなく、船を求めて三田尻へ移動したが、仕方なく、富海の茶臼山に登って船便を待つことにした。

しかし、大軍の包囲・攻撃を受けて、ついに切腹し、同行した豊前・豊後の将兵数百人も、皆討伐された。ときに大内輝弘は五十一歳であった。

三　大友氏の衰退

高橋鑑種、大友と和睦し小倉へ

太宰府背後の宝満岳城には、高橋鑑種加勢のために、阿曽沼広秀ら防長の兵二〇〇〇ほどを送り込んでいた（『赤川文書』）が、立花城を開城し、香春岳城・松山城も放棄されたため、孤立無援の状態となった。ここに、大友方の旧知の人の斡旋によって和睦し、高橋鑑種は豊前小倉へ移り、入道して宗仙と称した。

これより前、永禄十二年（一五六九）八月、毛利氏は、高橋鑑種へ誓紙を送っており、宝満岳下城の交渉